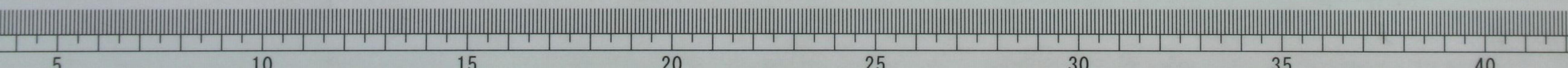




榛名山の朝朗
 箕輪村の父霞
 群馬の嘶馬
 第一編





其
輪
村
金
松
堂
上
格

上

10

15

20

25

柳香編
園政画
金松堂梓

席蓑馬嘶第二編
上之巻



<48-8341>



咲く櫻よるまぜ駒繫ぐ駒がけいさめい花が散ると花を傷むる風
流男あゝ糸と書肆が需めし乗出し中野原野に群馬の
嘶きまく拙稿手綱さまた腹帯も佳興大坪流の曲乗
ハ熟せぬ編輯は過る業と確固燈は取着て危い初編の
鞍よまごづり何らや柏子よ乗が来て三編の讀切まで
やまきし駈出を趣向い出来たが看客諸君く尻懸
鞭を當らんと面懸し耻を書きまて泥障り来りたる御愛
顧と力革と夜間為業は金松堂より迫立らまてのをよく
合せ櫻の様は美しく癸兒冊子の前後錯雜の合巻の不
風流よも固辞付と序文と自ら書と雨り

明治十四年四月午の日

彩霞園柳香誌

馬車の往來を詠めまき
川町の煉瓦對りて

羊馬切二





藤旗群馬嘶第初編上の巻

彩霞園柳香著

一犬嘘と吠て萬犬吠よ嗚の道理性古より今世よ鳴るまじ
 良もまれを立智頑蒙の性と嬌幼一其拳よ糸よ己が
 不平の積弊を教せんとするの軍教拳まると自逞ゆるお近く
 の戦後の月岡軍刀のどなたも他紀州の児玉之重次城宿墨杯
 の農民暴動よあつてふ何れも政府よ抗よ不軌と企謀の
 肝要ありこれ及よあよ義民の名よ空一うを身を様
 けみして頑民と判し衆庶を救ふよあつたる那の依念
 宗吾の輩いま此類る者あるべく近年の一揆暴拳
 と唱ふるの愈に突よまるとらと其拳同トウらふるいふ
 謂一犬の嘘よ吠る張突よつてく鳴くがごとく其愚や

笑ふ一
 手情や憐れき
 のきよは明治十四
 年二月下旬
 東京の西小
 口十餘里と距る
 群馬路(一)宿
 前橋(下)西群
 馬路(上)月
 那中(下)十八ヶ村
 の者芸が椿
 名山の村森よ



集令
 強うあらぬ
 勅許する月経の
 大書紀官とめあ登
 於房官由出候の
 上院より傍の傍を
 分置(魚)接出雲と
 名をこれし終るりし
 开ゆこの一授の信保賜
 と因よ椿名よの
 柿葉字中(下)と
 いつるハ花漢(上)



系
 節
 向幕
 施ぬの
 投百年お
 より

つぎ八十一ヶ村入会
 の地としてこれを株
 切せし八十ヶ
 村のうち
 松の原村外
 の村を以
 附六ヶ村と
 株一高
 明登村
 外土ヶ村と
 判元土ヶ村と株一
 溪川村外六十一ヶ村と

中野組

その
 税合
 とは

○変更した
 税金も六
 十八
 円九十
 八割を
 課せり

よの代るく
 年表とさ
 る

その
 税合
 とは

札小十ヶ村とさう判元
 毎年切符を割一札小
 村へ受取しを金を以て
 株永と直納せ
 れ下村の判元
 の切符をたれい
 株切りする
 るをばまき
 判元札下の
 株切ありあり
 錢目とも税判元十九ヶ村
 の共有といふありませ

名株を賣し金
 賣年村を以て
 合八十二ヶ村の株切と
 ある能くを株
 庭よりの

○官民共有の区
 内
 税目として税面表を修る也

八十
 二ヶ村
 の
 人
 には

小
 つ

つぎ 割付
 激收上納
 まるごと
 ありぬけ時
 救百年の
 旧懐一巻
 一七明治
 年地租改
 正実地測量
 の舉ぐるふ及ん
 で野付松の辰村
 の地先早八町歩



抹茶しれども白濁の濁る柿
 びやの背て死
 梅
 大がしうざせ 乾
 大のま
 大のま
 大のま

同村地内の支府地
 とある元福彦旧
 政府裁許後法圖
 二枚るとりどまらざる
 る名居やいふと明治
 十一年於多未條別領
 本ふより松の辰村清味
 其の月端を必そ其の口十
 町八歩之終分本と極付んとは
 板障の有るを口障本同ふよ
 口障へ向付分ふ村あり善地
 村外を村に板障をたぬ初と



少き能
 の区長
 一回運送を
 本ふより一が
 旧れ
 下村
 又より頻る
 苦情記くりく一回
 つる



つき氏も困
ト果て入舎
株場松分木柱
立致虫ハ疎ら
を新ひや
かハ時松の沢
のちのこ都々ふ
ありくハ地祖
改正の此一村松の名
義ハ改まる入舎の
名義ハゆづぎとハ
多 維明治十年

此度の隆礼と
巻記を基とハ
為一月松之ッ寺村
のま隆礼
維明治十年
松分木柱
立致虫ハ疎ら
を新ひや
かハ時松の沢
のちのこ都々ふ
ありくハ地祖
改正の此一村松の名
義ハ改まる入舎の
名義ハゆづぎとハ
多 維明治十年



十月のふゆ初ま十一
年一月松の沢村の松
分木柱可ふ
あり標杭と

○ありぬ
然れどもその不平のむハ者
村の農民が胸ハ秘蔵云
が且ど奇と集るとこのハ
後政
朱名
小の
松分
木柱
立致虫ハ疎ら
を新ひや
かハ時松の沢
のちのこ都々ふ
ありくハ地祖
改正の此一村松の名
義ハ改まる入舎の
名義ハゆづぎとハ
多 維明治十年

後足松澤村分木柱

次 始と情事

つき園一々
 ようきよ自
 魚角虫の
 是重あると
 洞家一人
 悟るよま
 舟屋又安ん
 せざらん事
 と述之屋
 刺のつみ
 一日も甘ん
 くと居る



△おくま
 大木の沢村の
 船分本汗可
 りにみちをその
 高を
 得ぬ
 我は
 も不平
 小堤へさ
 是と不
 合の事
 動ゆる

くろざるを
 洗し由各自
 然と那中
 よき名を如
 らま公松とも
 又米のると
 へ念去屋が
 体よ来てその
 裁断を尋問
 最も人をゆり
 中野練場の一
 全野勝味の小



△おくま
 大木の沢村の
 船分本汗可
 りにみちをその
 高を
 得ぬ
 我は
 も不平
 小堤へさ
 是と不
 合の事
 動ゆる



つぎ 沢村の宴を
 脱して来るがはたと
 くらとあがたる縁の
 ときく
 高くのちとの
 小松分本
 と儀例

▲悠と彼より松のほ
 村の農民等いかに死
 俄ふ人て悔儀あこの
 私暴と

▲二統出て防げども元
 寡争てり敵志
 き遠く 松分本
 分の一と伐採さしよ小
 ありしををもちふは松分本
 松分本友(存)け出松分本
 巡査松分本考由出松分本の
 久制さると中く皮
 づら動静よみく松分本
 松分本を罵しりて
 只松分本
 強だ立り

鳥橋河夜叉評

八尾編 松重夜叉通春秋 人編

川一氣傳

五尾編 不廣洋邊萍 人編

水錦隅田曙

三尾編 腕籠心三侯 人編

格蘭氏傳倭文賞

三尾編 徳相場花王夜嵐 人編

地本問屋

金公堂 山崎



榛名山の
朝朗
箕輪村の
父霞
群馬の
嘶
第一編



4530
2



旗

群馬嘶

柳香海

予て海の中

周政通

さふ好

群馬嘶第一編巻の中

彩霞園柳香著

中野原所へ集合せし領民共の警部巡查が制する群馬
 嘶の由も入とぞイザ此上は長き余の法問せんといひ原
 野より逃く操出し箕輪の城に字城法に上て人救と
 探へ西明屋村に入り翌十九日の漢川村字道場に来迎
 精舎よ余氏一明る廿日と待て松の深村漫地の意成
 同ひその返答よよつとハ糸と棄て由事とるさんと置
 發きく須静る動静由更なるり一が同探り村
 の縣令後負志村彪之氏がとの騷きと聞きうち騒がた
 六松かつはぬ由く一たるあり疾く須松とせざるよた
 大事小政ふも知はざしと心と痛めるおろし同ド「反



<48-8392>

ときふふ腑とくつめつ月日
那長下回達秀氏が子息
純一宗氏がこどもは松と
せんめいと老村氏方へ入り
来り西倉ら一は双方の
和女と徳をん
を意と彪之
氏へ信らはし又
そのと松
者もつと
心と芳世
が貴下も



その由名屋のイヤ
伏之水
張せん
和女と
解る破也
濃水
と打
金
来
純
同

とのふ奇をほし
彼我の男と周旋はし
あは和女をわぬとい
ゆるま一純よこの争と
腕動するは松もあ
ニッ寺村の
まがりのが
ま陸級派が
後援する
ベ一結
よの級
海と對
面して



又いふ松と
解る破也
濃水
と打
金
来
純
同

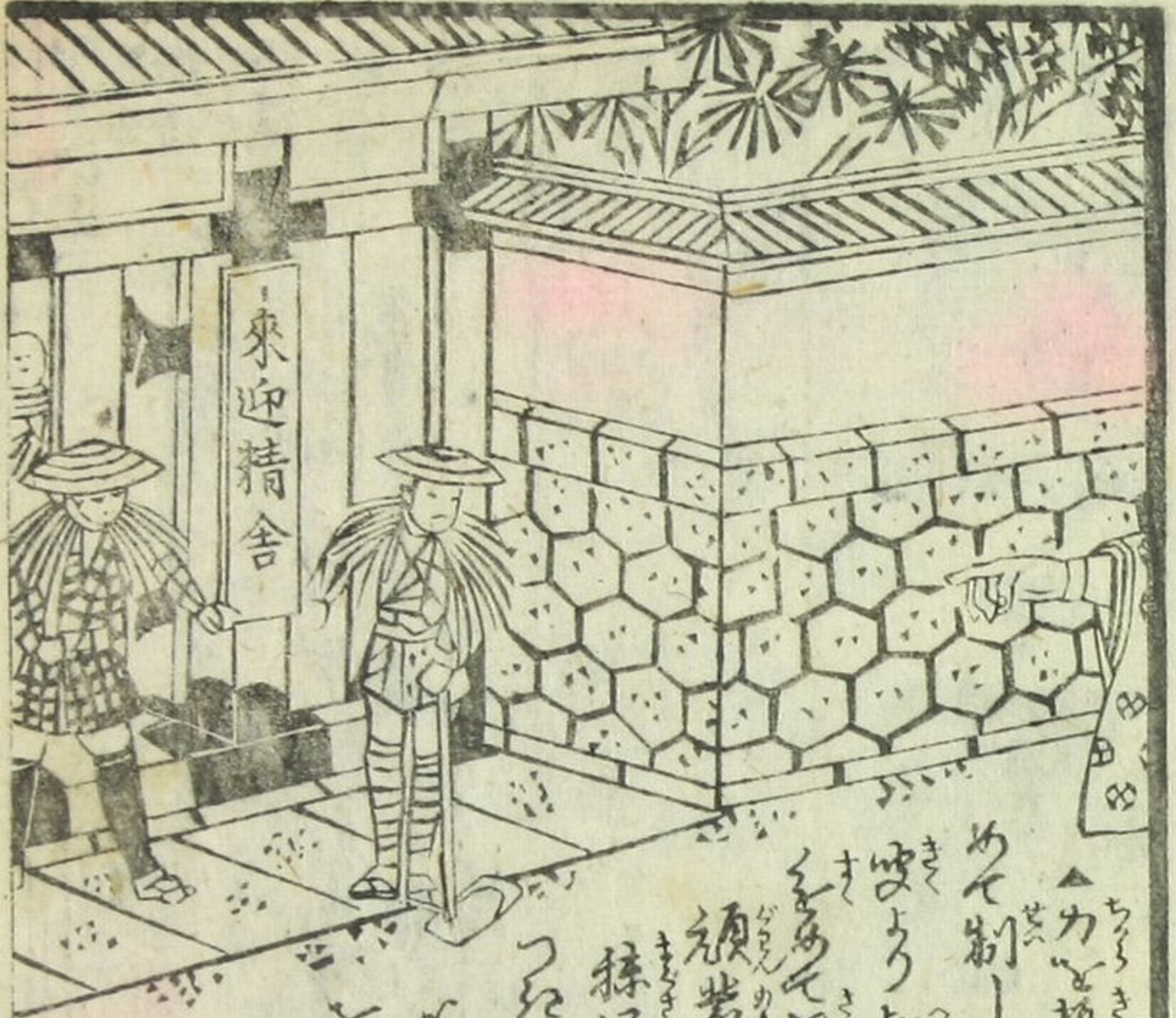
羊馬の口



つぎ 舎を中と云入てうちをうま院ふ
 入て清る程なく立出るの邊
 後海舟と云るより
 と倦げと進んで
 がみぬの者君の口出
 びえりのかこの邊
 制止と止らぬ勢ひよ止るはむ
 高雨を中後へもせらる

よくの邊
 えとど
 るゆか

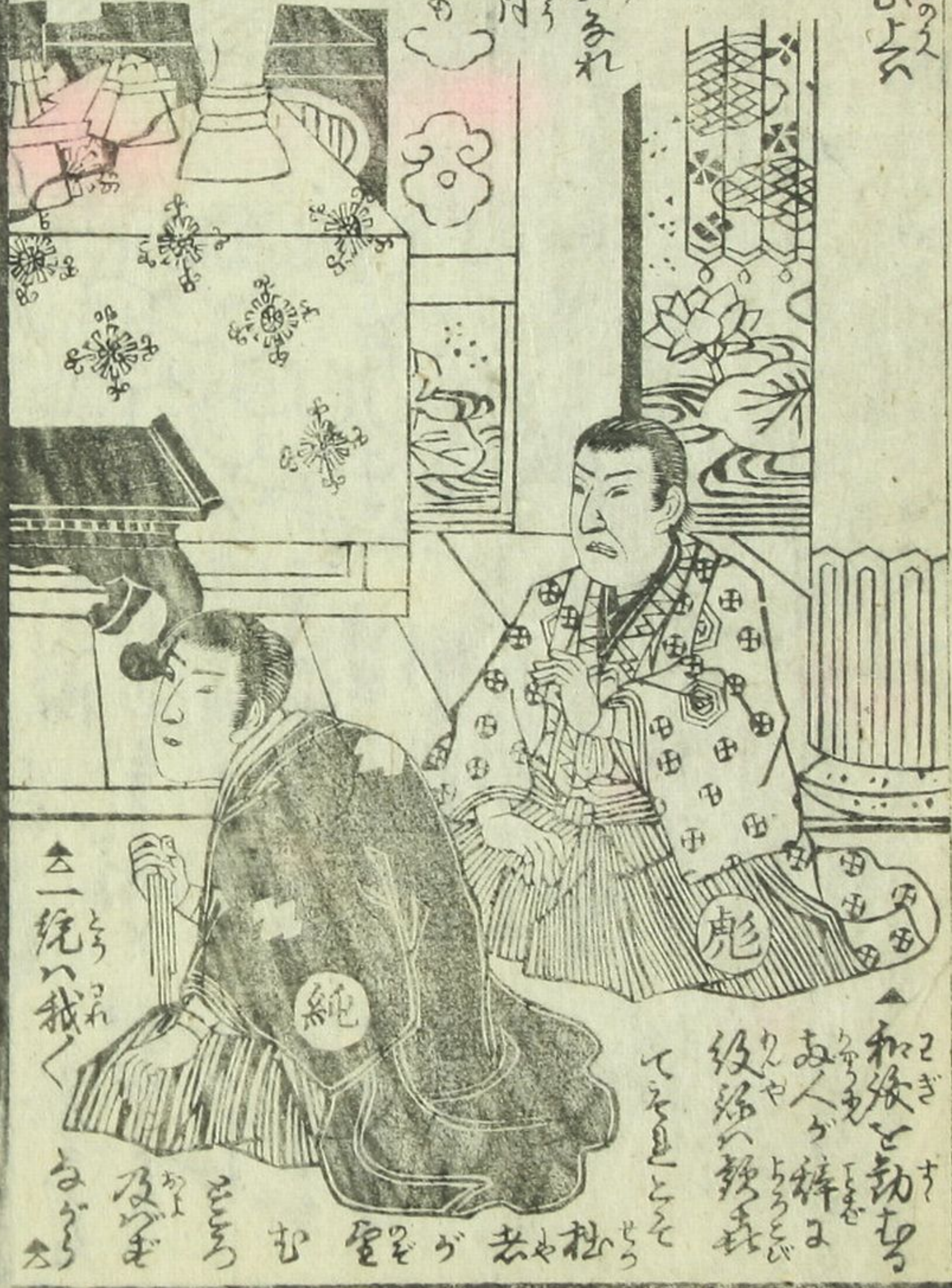
△長
 教て
 る程む
 めも
 みけれとせ
 高雨中
 ありも
 らま
 分の二



△カと極
 めて制とせまると稱せ
 せより 彪之氏 席と
 をあて扱えやうを智
 須紫の一切
 標場のまをまよ
 つた不富のうら
 かりとそ若後
 と顧ぶるのわ
 学をさる程
 のつる懐ひ情
 実と察せま

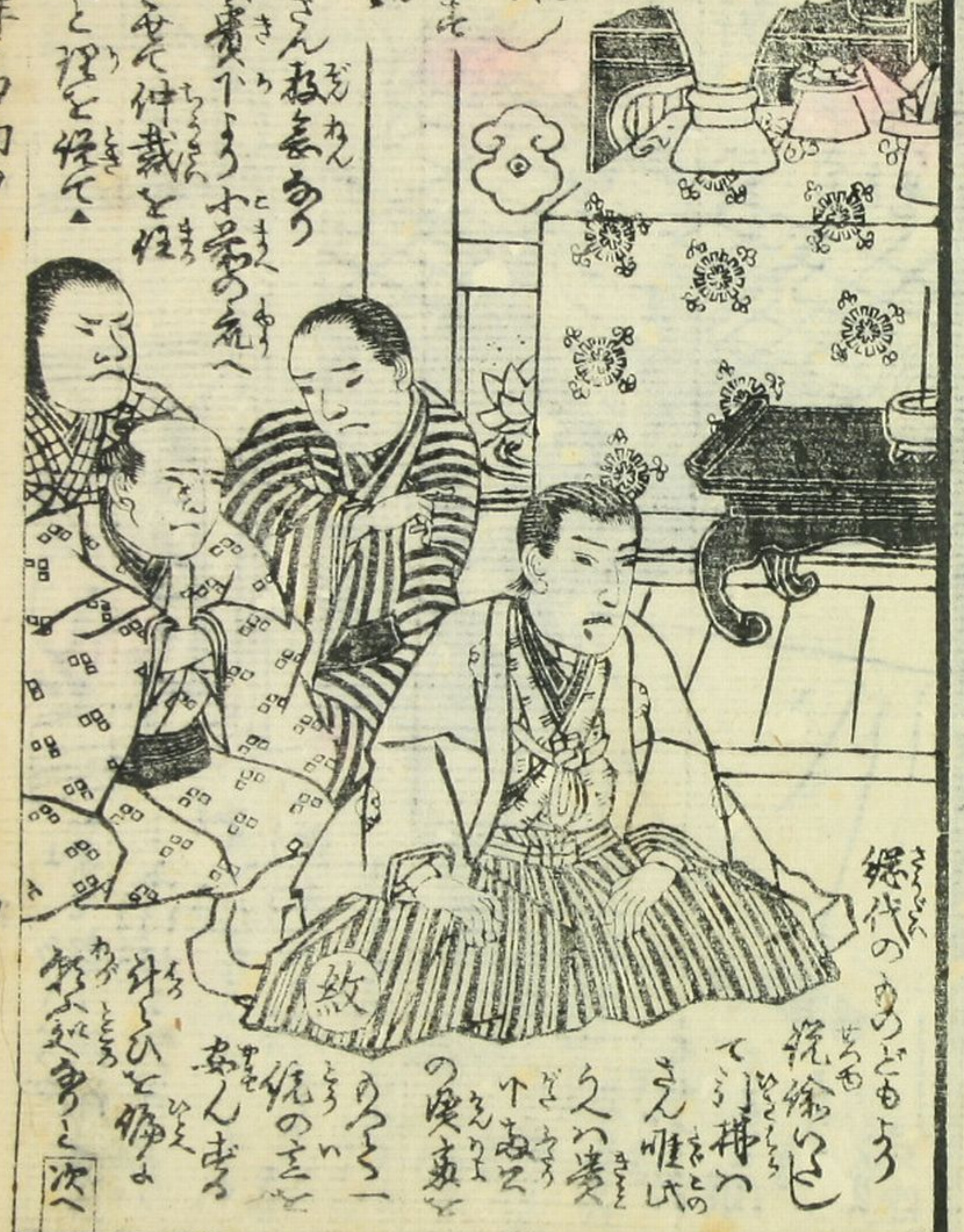
△長
 今度のよた
 拳のうま
 施まを制
 止むが中
 せとあせ
 るある
 まれと今更
 及びさる
 今日まの
 拳動
 是犯色
 二

つぎけよ
穩俊
み法
肝要
まれの
我
この
仲裁
と任

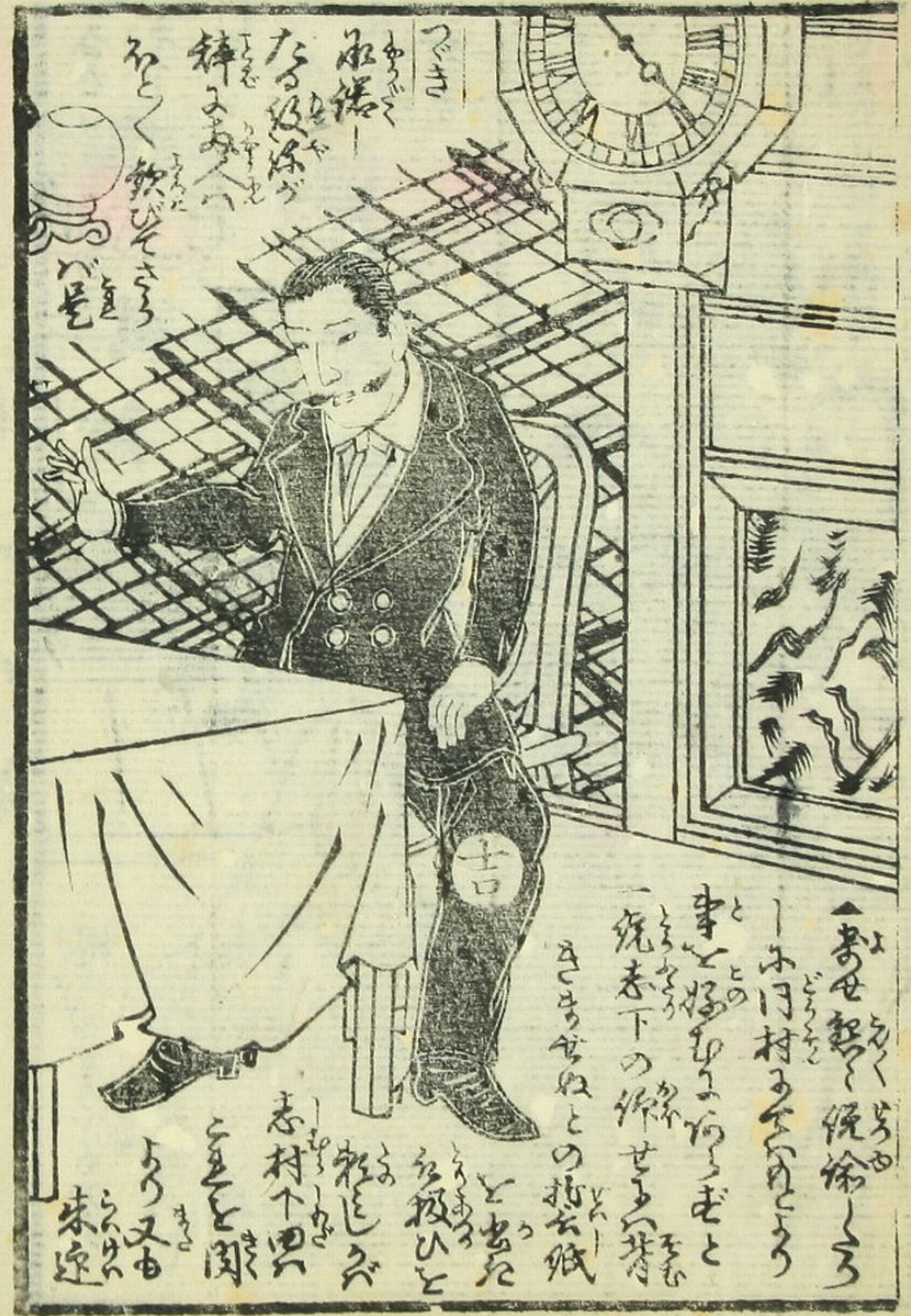


△一統ハ我
純
彪
和俊と劫
おんが
紋
て
な
及
な

みる
中
と
一統
の
仲裁
徹
この
仲裁
と任



△一統ハ我
純
彪
和俊と劫
おんが
紋
て
な
及
な



承徳
なる
村
代
は
り
と
く
飲
び
そ
う
は
な
し

▲お世懸く候ゆへ
一月村をいりて
事と好むふゆと
一宛志下の作せよ
ききせぬとの折云紙

志村下
と
は
な
し
と
く
飲
び
そ
う
は
な
し
と
く
飲
び
そ
う
は
な
し



安徳の付らひ
むら
せん
代
は
り
と
く
飲
び
そ
う
は
な
し

なる
八
十
二
の
と
く
飲
び
そ
う
は
な
し
と
く
飲
び
そ
う
は
な
し

つきせんと金く
云々のとさる斗
らひるまはまの港を
め一統の疎の外致び
厚く美人が男と相見
らひ同年十月八日
上芝村を和解の
宴と開く「よ交」
中野系世の地形よ
より小ニテ村と込
解合して總代と立て
よ和解と修むるその物定



五
村子と親を
まは
り
松
名
入
と
る

書いたのじ「一本形」
名ふつき官有林場字
中野系城中よ入舎村のち
松の沢村清水勇達外七
後村官有地と保潔一終分
本殿規よ基つた
去る明治十一年
八月十日本報
長官の件
可と乞ひ
別ち明治十二年
一月廿二日待客と



り十八日よ入舎村
元慶よ終てい素より中
野系林中入地之松
の沢
加の
沢村
長そのお人へ届けつた

つまき 出の食其肉扱ひ人ま入り目
 各村人民及び長者数代人よ
 おま和解たのわ一
 一條松の及村清水
 勇七外七名よ
 及別は十八ヶ所余歩
 の地へ全く及有
 縁場を後村
 官地と保り
 小よつたえ滑中
 勇二條尾を
 と縁有海小

△終分末地と
 扱ひの横
 あり
 刈た
 の人
 の肉



本家の
 小げは海可の
 上へ入舎各村ま
 代換やまき
 勇二條松の
 小て中地縁場
 と保修と改
 地引簿に記載の
 有るを
 以上各村民
 て不
 勇二條松村内
 入縁場人

△終分末地と
 扱ひの横
 あり
 刈た
 の人
 の肉





有地へ新
入道の義
兄弟之條
の如く
不同の道
中をたふ
但し向後人
民両方の地
へ新入りの義
皮して後ま

▲控は以降彼は若情
中をたふの義六條今
圓の費用
金六五△



小の弟又條
旧地分各村
小松の沢村
終分未地人及
降之連
署証去に
出ても金
入去各村
代理各村
きふつた今回
和解お替ふ
うの各村△

▲費用とを別
去用ハその
所々適宜
たる

○ベきもの和解
お替ふうの義見より今月
牛での隔玄和解一更ふ

つた



つぎ
 於分本坊
 分界の調へる儀ハ
 一和商儀の久
 望一見よ路

山
 中裁二人と書

約去の

和解の儀緒漸く開き
 集合せ農民ハ
 女目張ら出帰村
 一七よあて妻塔居
 乃後亦後全
 七土月
 又月形長右
 見氏も上並
 村の宿安席
 よ堂と和解定



かひの汁ハ
 中まてくハ
 係之違署
 如件」と致
 林坊組合
 十八人と宣め
 更子熱代中
 より大熱代一名
 戸長總代三名

林坊組合
 地元松の沢村等
 奔走と云

八き熱く
 小隊されこれより
 後安の林まを飛せ念か
 熱研せがけと大熱代
 つ受

つぎ 去陸級... 一備... 逆流... 白川... 拂... 髪... 氣... 霖... 解... 此...



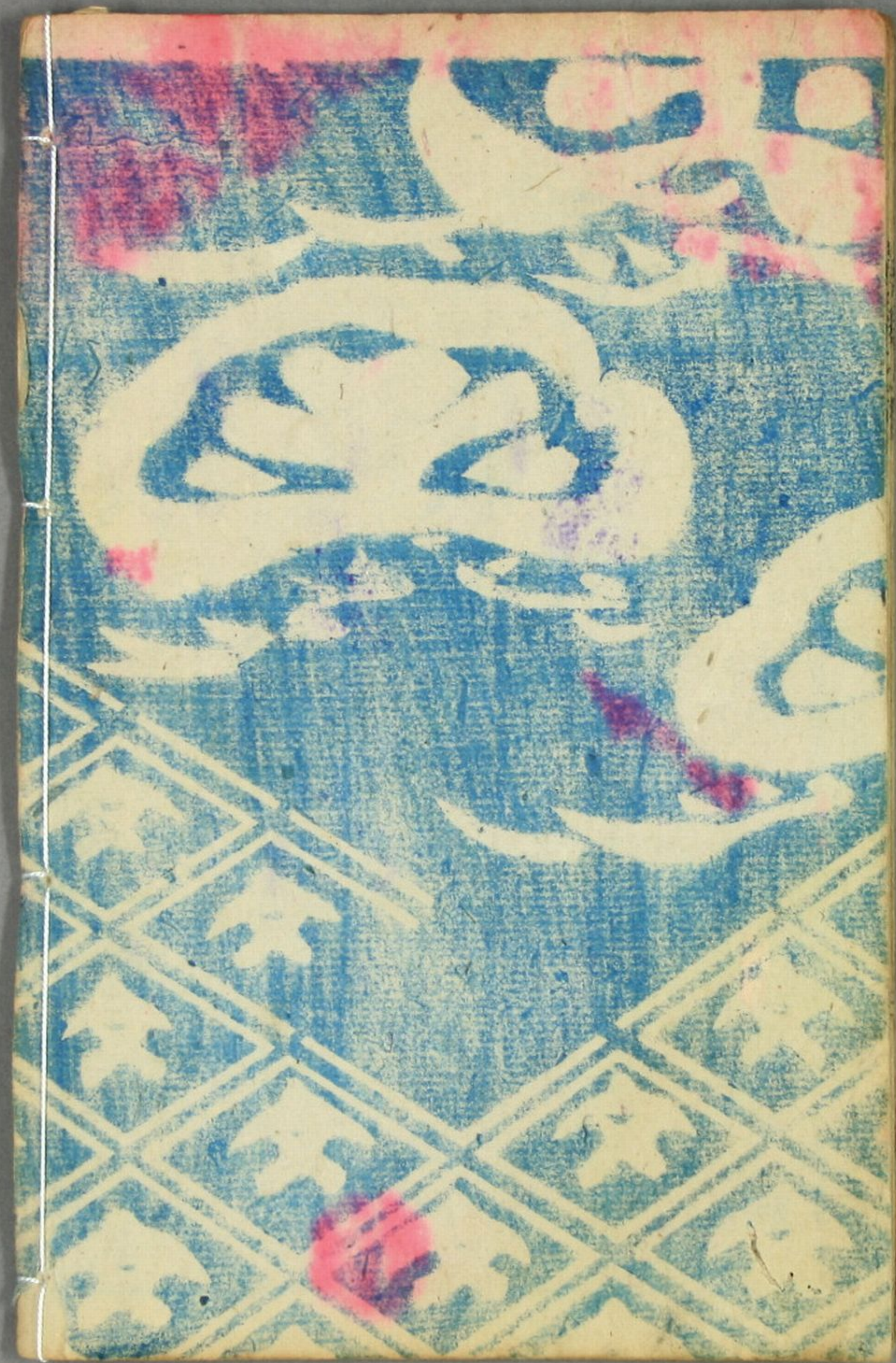
若知... 海... 知... 為...

官 許 天泰丸

此... 天... 海... 知... 為...

文 錦繪問屋

出... 文...





10

15

20

25



藤旗群馬嘶弟初編巻の下

雜賀柳香著

總て双方の和解誓ひ約定去とせ給せ一上日連署して是まで
 松の沢村より松分本とて有藏せ一本形ひ下げの長と録懸へ掛け
 一がまを渡りて何月と經ても可吾の指令らざるうち松の沢村の者
 ともい上差村もてお徳ひ一約定と違ふて破約せんと思ふま
 終る一て四人の惣代人の東京より出た高崎免件代云と有松山
 知好氏へこの約定破約のみと委任せ一山氏も是とまるま
 ありたる故や中流一と違ふ總理の代人とあり破約の指令
 及びする一柳一ま一他は破障ありて移る遠約と云ふるとの二條
 申らるるがその虚実の如何い知らねど暫らくその間一
 義一脱かして紀さん那の大総代去陸級深よ級の助といふ一子
 たりと性事松の沢村の柏木長共清の娘をさうとらふと要り次へ

羊馬刃下



つきざねよ
 我まある
 振舞い
 人懐こ知
 らぬ男と
 女の使
 きさるよ
 級海い徹
 笑と女の氣
 痴と知をハ
 そんる不男
 もあるであらう

松の沢へ知はゆと
 万一豚のには
 松の沢へ知はゆと
 科の科の科の
 科の科の科の
 科の科の科の
 科の科の科の



う長き清とを
 も松の沢へ人
 よかるとは
 敷代の巻家ま一材
 のおとらとては
 ても子まが乃娘
 の偏まひり
 渡まの男で
 る一己も今度の
 一舞の舞を多知つて
 終と物よまを信一
 終と物よまを信一

きつた方の
 一密の者
 のおよかて
 次へ



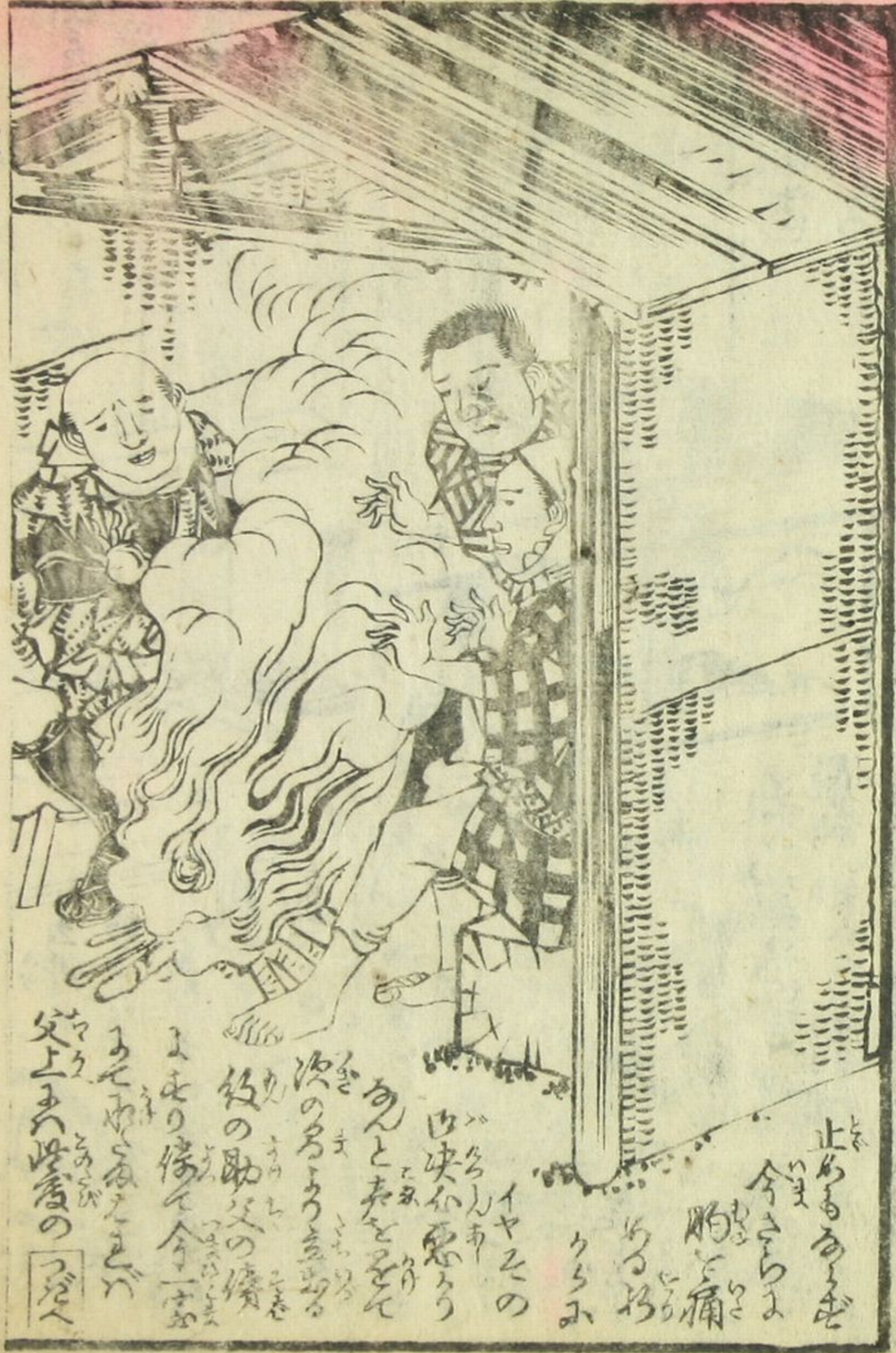
今更に...
 のもてい...
 決心...
 今更に...

ねん先...
 母を...
 又...

今更に...
 母島村...

母島村...
 母島村...

母島村...
 母島村...



止らぬ...
 今更に...
 母島村...

羊角刀



家名

干渉しぬ何

小も長民と称せんが
和一の務をとりひき

ハ後の
助が中

て徳便よ招預るてお長
の名を末せよまを西邊次

何卒を
知の
役除あ

君



▲そのや
長よ
らるき
ひ那の
下総の

つぎ
疾
乃
カ

▲その玉段の券
碓屋製
余は人民の
乳

長
大勢
ハ後の
助が中

箱

主

べき 無と偽ふはひ
 なるると理明明白
 ある時つれづれ
 元より腹心
 海たる父の面
 と和らげて負
 ふこゝろ小教
 へらば海津
 と偽る世の
 時を待て方か
 今の一云紋添
 が迷雲忽地を舞う
 きてくこの久ハ



後途の
 乃と云ふ
 山
 紋の
 助もかく
 後途せんと
 我家を出る
 坂む途中
 坂村外且の
 野小家まで

集合せし領民
 家之儀論し及ぶ
 生老の力方せんか
 易くは是れと父
 が持し紋の両ハ
 古長又申し出
 たる持云を川
 ひがさるる
 の家受の者老
 承けむと存る
 と己が居て之と
 由りが縁と望
 同全個紋添ハ



其の
 由りもその小集合を
 協定するは
 先之承得る
 亀
 紋
 傳

つぎ 静と多聞は二文の百柱が
 多きを凌ぐ焚火の暖り 縁場
 寝ぎの字形も 喫入りのと
 毫細らまじが 膳を 焼香
 あつみ一人の男の小まなりのナントお茶
 ごとまの 具形が今般集合更
 か出るまろと 流しを更
 一の 知らぬと
 何と 流さうが
 多きを ねまの
 ぬふまろと 紀と一と
 一と今般のふも 名も南
 不系野へ 集合と 去りやの



生死の二つと今日
 羽目のもち 西明
 村の 後川
 集る
 横のみ
 あつと
 いふが今
 と尻と押
 と人が命
 口果る
 て 怪病 息

但もよ今般今
 強の 林村 徳七と 名
 後村の 松本 泰二
 さへ 派 作る 出 何 ても
 今般の 一と 大 勢 集 合 更
 悪の 一と 二と 引 文 形 出 する 小
 よつて 下 先 倉 へ 引 取 と 以 て の 外 の
 偷し 方 へ 何 う の 似 や ら 分 ら ね ど 後 まで
 大 勢 押 寄 け け せ ぐ ぬ る 一と 出 来 ぬ と 福 信
 村の 善 本 さ ぐ 主 地 法 て の 出 流 し 由 冬
 一 統 の 為 で 中 へ 勤 め せ ぬ 一と
 へ 其 誰 さ ん と 縁 分 小 ね せ ぬ
 見 地 四 区 長 の 不 村 さ ん 五 区 長 判 一と



止るとして
 の 助
 喜
 一と



此の末が案
 らと強しの折
 うら吹ちる風子
 燃えたる火を消
 せは強しも消
 えて各々の
 衣と衣
 初めと
 紋の助
 小首を
 髪削
 不棄



此の末が案
 らと強しの折
 うら吹ちる風子
 燃えたる火を消
 せは強しも消
 えて各々の
 衣と衣
 初めと
 紋の助
 小首を
 髪削
 不棄

此の末が案
 らと強しの折
 うら吹ちる風子
 燃えたる火を消
 せは強しも消
 えて各々の
 衣と衣
 初めと
 紋の助
 小首を
 髪削
 不棄

彩霞園柳香著

ついでに寺村の樓居とこそ

ひりたる三索西を道より後考ふ

現せし級の助が縁きりより

いづく松の沢村破約の一条

本年一十年の暴

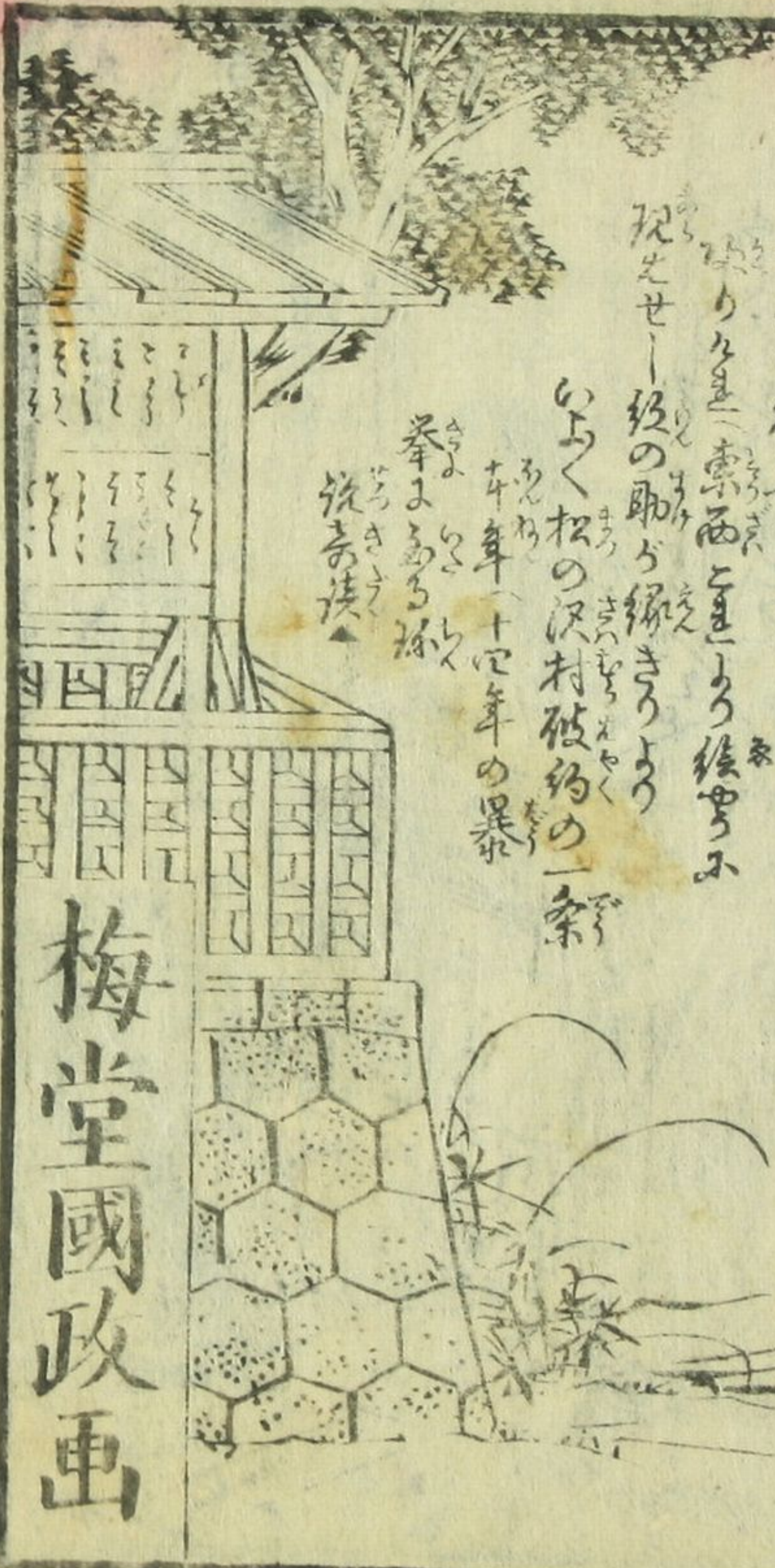
挙よるち縁

後考法

不日二編の最後と

まじりに巻を

何んして成る



梅堂國政画

官朝

牛肉丸

許名法

中色代

官

天泰丸

許

包代

牛肉丸の作りかたは、先づ牛肉を細かく切り、塩、胡椒、酒、醤油を加えてよく混ぜ、丸く成形する。天泰丸は、天竺菜、葱、生姜、胡椒、酒、醤油を加えてよく混ぜ、丸く成形する。

文地本問屋

錦繪 泰堂 問屋

楚帶
篋
群
馬
嘶

九
角
三
五

道
黎